虹の子学級

五十周年記念文集

金子　明博（別刷）

杉並第二小学校

クラス会の楽しみと悲しみ

金子明博

はじめに

一般的には、同窓会やクラス会への出席率は、定年が近づいたり、子育てが終わったりして、時間ができる中高年になってからが高くなる。　しかし私は卒業直後から、クラス会によく出席する方であった。　それはクラス会に行く、私なりの種々の楽しみがあったからである。それを披露する前に、私の通学した学校に関する背景を説明しておくと、私のクラス会論を良くご理解いただけると思われるので、簡単に述べてみたい。

私は昭和二十一年（一九四六）に、東京都杉並区にある杉並第二小学校に入学した。　入学式の時に、校庭の桜並木が満開できれいだったこと、担任が安田先生という口紅と頬紅の目立つ中高年の女の先生だったことを覚えている。父親が国家公務員であった関係で、四年生の時に札幌に転勤となり、明治十一年創立の伝統ある山鼻小学校に転校した。　何故明治十一年創立かというと、前年に西南戦争があり、屯田兵の町であった山鼻からも兵士が鹿児島まで出征していたためらしい。　休日に友達に誘われて、熊が出ることのある藻岩山に恐る恐る野ぶどうを取りに行ったり、スキー遠足があったりと、広大で美しい自然に恵まれた生活であった。　ただ、終戦直後のインフレ経済下では公務員の家庭の生活は苦しく、しっかりしたゴム長靴が無いため、雪道を運動靴を履いて登校した。　雪が足に入って、ひどく冷たくて悲しい思いをしたことが昨日のことのように思い出される。

父は私が小学校六年生の一学期に長野へ転勤となった。　札幌駅では友達と泣いて別れたが、家族と特別急行列車の二等車に乗ったことや、青函連絡船の船旅、浅虫温泉に宿泊したことなど、物心ついて初めてした長旅なので全てが珍しく、今でも楽しい思い出となっている。　長野市の三輪小学校に転校したが、札幌と違い田舎で、私の髪型が坊ちゃん刈りという都会風のものだったり、言葉の違いなどあり、かなりのいじめに遭った。

幸か不幸か、夏休みに父が出張先の長岡で急死したため、二学期からは杉並第二小学校に舞い戻り、河村先生のクラスにお世話になるようになった次第である。　転校といっても、何しろ以前通学したことのある学校だったので、新しいクラスに以前と同じクラスだった子が四、五人いて、とけ込み易く、違和感は少なかった。

このような経過から、小学校に二つ、中学校、高校、大学に二つ、インターンと七つのクラス会に出席してきた。　それに加えて、高校時代のラグビー部のＯＢ会、大学の硬式テニス部のＯＢ会、高校時代に特に親しいかった仲間の会などクラス会から派生した会もある。

それらの経験からクラス会の楽しみについて考察したい。

一、クラス会の楽しみ

1、昔の思い出話をして、共感し合う楽しみ

なんといっても、かつて一緒に学校生活をした時の思い出を語り合い、共感し懐かしむことが、クラス会の楽しみの基本であろう。　特に高齢になってくれば、この楽しさは益々膨れあがる。　最近のニュースを賑わしている、北朝鮮に拉致されて帰国した方々が家族との再会の後間もなく、まずクラス会が開かれたのも、このような意味で当然のことであり、クラス会はそれほどの重要性のある集まりなのである。

2、片思いだった子に会える楽しみ

先ず私が既に十代から、大のクラス会好きであった最大の理由は、それぞれのクラスにいた、あこがれの女の子に会える楽しみであったと思う。私は奥手で、気の弱い方なので、好きな子と個人的に交際することは勿論、気安く声をかけて会話を楽しむこともできず、卒業後もクラス会で顔を見られるのが、何よりの喜びであった。

3、人間が成長し変化していくのを見る楽しみ

クラス会に行って一番驚かされるのは、昔は簡単な問題にも解答できず、勉強もしないし、行儀も悪く、成績の良くなかった子が、卒業後のクラス会で会うと、立派な社会人になっている事実である。こんな低い学力で、

将来どんな人間になるのかと、生意気にも私が心配した子の多くは中卒で就職しているが、なかには大学の先生になっている人もおり、子どもの頃の学校の成績とは、どのような意味があるのかと大いに考えさせられた。

勿論、成績の良かった子はそれなりに立派になっている人が多いが、意外にそうでない人もおり、人さまざまである。

そう言う私などもあまり偉そうなことが言える口ではない。小学校時代は目立たない方であったが、中学生になって六本木にある港区立城南中学校に入学してから、急に成績がよくなり全校でもトップクラスになった。先生が授業で講義したことが、吸い取り紙に水が吸収されるような感じでよく理解でき、簡単に記憶できた。そして授業が楽しくてたまらず、待ち遠しかった。そんなわけで当時進学校として全国的に有名な東京都立日比谷高校に進学でき、思春期のエネルギーを発散したくてラグビー部に入った。しかし、やはり秀才が多く、私はあまり目立たない方に逆戻りした。

東大医学部出で外科医の叔父が美人のお嫁さんをもらったことと生物学が好きだったこともあり、医学部に進学したいと思うようになった。家が貧しかったので、国立大学の医学部に進学すること以外は考えられず、東大を2回受験して不合格となり、東京農工大学農学部に何とか合格した。当時東大医学部に進学するには、教養課程修了後に入学試験が公募の形で行われていたので、進学課程で再度受験することを目標に、農工大で教養課程の勉強に熱中した。　ドイツ語は高校時代に、第二外国語として2年間履修していたので、若い講師の先生の誤りを授業中に指摘することが何度かあり、ほとんどの同級生が初めてドイツ語を体験するので、その差は歴然としていて、すっかり学年のヒーローとなってしまう程だった。　苦手だった数学も高校時代より易しくて、不思議にすらすらと理解できて楽しかった。　そのため敗者復活戦で、見事勝利を収めて東大医学部に進学出来た次第である。

4、他の業界の話を聞き、世間を広くしたり、便宜をはかってもらう楽しみ

私は人一倍好奇心の強い方なので、クラス会で各個人が語る現状報告がとても楽しみである。他の業界について以前から聞きたかったことなど

も、クラス会で出会った機会に聞き出すことができた。とくに海野好彦君が経営する好日山荘で、スキーやテニス用具を大変な割引率で購入できたのは助かった。後に彼の店が倒産したが私にもその原因があるのではないかと反省している。あるとき、数日以内に数千万円を用意する必要が生じたとき、東京銀行の支店長であった小川好毅君（高校時代）が、支店長の権限で用意してくれたことがあり、今でも大変恩義を感じている。高校時代にラグビー部で一緒に苦労した、日本郵船社長の草刈隆郎君とは日本経済新聞の『交遊抄』や文芸春秋の『同級生交歓』に掲載される機会があり、飛鳥でのクルージングの際、破格のグレードアップをしてくれて優雅なクルーズを楽しめた。

5、自分の専門分野でクラスメイトの役に立てる楽しみ

私は眼科でも目の腫瘍の診断と治療を専門領域としている。札幌の小学校で抜群に成績の良かった同級生の女性の息子さんが、片目を網膜芽細胞腫という目の癌に罹り、某大学病院で眼球摘出を受けていたので、クラス会で会うたびに相談されていた。「お孫さんができたら、念のため出生後一、二週間以内に眼底検査を受けること」を勧めていたのだが、生後三ヶ月で初めて私のところを受診した。両眼に中程度に進行した網膜芽細胞腫が認められたが、我々のグループが開発した新しい治療方法で、眼球を摘出せずに、両眼の視力も残して治癒させることができて、なんとか面目が立てられた。私は眼科でも特殊な腫瘍の分野を専門にしたため苦労してきたが、その甲斐があり嬉しかった。眼科の領域以外の病気についてクラスメートから相談があっても、医療の分野では知人が多いので、然るべき医師を紹介して、満足すべき結果が得られ、皆に感謝されていると自負している。

6、共通の趣味を分かち合う楽しみ

私は四十五歳から、大学時代に少し体験した硬式テニスを平日の夜や週末に、ある高級スポーツクラブに入会して再会した。凝り性なので、有名プロコーチの個人レッスンを受けたりして練習に励み、中級の上位には到達したと自認している。クラス会の折り、たまたま河村先生もご夫婦でテ

ニスを楽しまれているとお聞きし、師弟対決をお願いしていたが、昨年ようやく私のスポーツクラブで実現した。私の女房は残念ながらテニスをしないので、クラブの友人でＮＨＫに勤務している、河村先生の後輩の河邑さんをパートナーにお願いして、河村先生夫妻と楽しいテニスができた。私と先生との十歳の年齢差を考えると、先生のご活躍ぶりは素晴らしく、「私も十年後にこのように元気にテニスを楽しめればなー」とうらやましく思った。

7、友人を増やす楽しみ

在学中はそれほど親しくなくても、クラス会で会って親しくなることがある。その極端な例は、そのクラスに私が在籍する前に転校して、クラスで席を並べたことがないのに、クラス会が出会いの場となり、友人となる場合がある。その典型が、杉二の内田昭男君である。彼は学生時代からスポーツマンで、なかなか太っ腹なところがあり、バーやクラブ等の夜の生活に詳しく、二次会では大変お世話になった。富士電機冷機の副社長にまで出世した男だけあり、人を見る目があるのか（？）私にはとても親切にしてくれ、ゴルフを始めるときに、彼の古いゴルフセットを譲ってもらった。残念ながら、胆嚢癌になり告知されていたが、次期社長になるのに、がんセンターに入院したら拙いと考えたのか私に全く相談せず、末期になってようやく連絡があり、病床に駆けつけたときはすでに臨終寸前なのが一見して分かり、急いで私が家族を呼び集めるように指示した程であった。

二、クラス会の悲しみ

当然各々の人生を反映して、クラス会にも悲しみや、苦しみが無いわけではない。

1、偉いと思っていた先生がそれ程でなかったことを知る悲しみ

これは河村先生のことではないので、ご安心下さい。子供心にすごい先生だと尊敬していた先生が、クラス会で会うたびに、たいしたことのない俗物だったことが分かり、ひどく失望したことがあった。私は父親に早く死に別れていたので、父に代わる大人を求めていたのかもしれない。

2、先生や同級生に先立たれる悲しみ

担任の先生は少なくとも十歳は年上であるから、一般的には我々より先にお亡くなりになるのが普通である。我々はすでに六十三歳になっているから、ほとんどの先生は逝去されている。前項で書いた俗物先生も亡くなられてみると、一抹の寂しさを感じた。同級生も徐々に亡くなりだしているが、この場合は寂しさと共に、死神が私のすぐ後ろに忍び寄って来ているような不気味さを感ぜざるを得ない。

3、憧れていたクラスメートが老醜をさらすようになる悲しみ

初恋の人には会わない方が良いと言われるが、確かに成長して魅力的な人もいれば何故こんな人を昔は素敵だと思ったのかと、当惑する場合もある。お互いに歳を取ると共に変化していっているのであるから、昔のままの感情を維持するのは難しいのは当然ではある。クラス会で女性の同級生が一列に並ぶと、無論例外もあるが、独身者、専業主婦でない人、子供を産んでない人たちが若々しいのが、とても印象的である。子供を育てて、家庭に引きこもるとどうしても老けやすいようだ。久しぶりに会って、愕然とするのは酷かもしれないが、若い頃美人でも老化にはなかなか勝てないようである。

終わりに

思いつくままに、勝手なことを書いたので、もし傷つかれた方がおられたら、ご容赦願いたい。とにもかくにも同じ時間と場所を共有した、かけがえのない仲間なのであるから、これから残された限られた人生をお互いに助け合って、幸せな最期を迎えようではありませんか・・・。